

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第996号 平成27年9月10日

時の歩み

最近、時を意識せずにはおられません。それは若い人とは違って、走って行く先のゴールが見え隠れしているせいかも知れません。

西洋には、「時間が過ぎ去っていくのではない。われわれが過ぎ去っていくのだ。」という諺があるそうです。確かに、私自身の過去を振り返れば、沢山の事をやり残し、置き去りにしたまま走り続けて来た日々でした。

子どもの頃は1日の時間が今よりはずっと長かったように感じます。しかし、今は、1年、1月、1日がまるで飛ぶように過ぎて行きます。別に、自分としては生き急いでいるつもりはないのに、背中を押されるように、いや、手を引っ張られるように生きている、そんな感じがします。

ドイツの詩人シラーは、時の歩みについて、

「時の歩みは三重である。

未来はためらいつつ近づき、

現在は矢のように早く飛び去り

過去は永久に静かに立っている」

という言葉を残しています。

過去があるから現在があり、現在があるから未来があるという一繋がりの中で私達は生きているのであり、過去は振り返る事は出来ても、過去と決別する事は出来ません。振り返れば、過去は、常に影のように自分に付きまといます。

未来は、忽然と現れる訳ではありません。ずっと以前から、未来のほのかな明かりは見えています。私達は、未来の自分を想像し、ああもしよう、こうもしようと考えを巡らしていますが、その時がくれば、時は矢のように過ぎ去り、振り返れば「自分は一体何をしていたのだろう」と慨嘆する事がしばしばです。それは、たとえば良くありませんが、流しそうめんのようなもので、上から流れてきたそうめんを掴もうとしながら、そうめんがするりと箸の間からすり抜けてしまったそんな心もとなさに似ています。

だからこそ、一瞬一瞬の時間を大切に、今なすべき事をなしていくという事が重要なのだと思います。

過去は、私が生きてきた長さの分だけ膨大な筈ですが、しかし、過去は、常に私

の影としてただそこに静かにあるだけで、過去が何かのエネルギーを以て私に圧力を掛けて来る訳ではありません。

「記憶は過去のものではない。それは、既に過ぎ去ったものの事でなく、むしろ過ぎ去らなかったものの事だ。」という言葉があります(長田弘著「記憶のつくり方」から)。

時間と共に過ぎ去らず、我が体内に残ったものが記憶とすれば、過去は、ただ過ぎ去った時間の集積といえるでしょう。

過去に拘り、自分の生き方を狭くしてしまっている人がいますが、その拘りは、過去にではなく、自分の中に残っている記憶に拘っているという事だろうと思います。

詩人の長田氏は「記憶のつくり方」という本の中で、「記憶は自分の内にとどまり、自分の現在の土壌になって来た」と述べていますが、良くも悪くも、過去の様々な経験が今の自分を作った事は間違いないし、それが時の経過の中で記憶として浄化され、身体の芯に残っていると感ずります。そして、その記憶というものが長田氏のいうように、自分という生き物の依って立つ土壌となって来たのだとすれば、ただ時の流れに身を任せるのではなく、少なくとも記憶に残る時間の使い方をしなければならぬ、しかも、より良い記憶として残る時間の使い方をしなければいけないと、改めて思っているところです。

(塾頭 吉田洋一)